

して使用し、実際に教室で使用するには、もう少し形  
のちがった、内容的にも興味を持てるものにした方が  
よいと思う。あるいは、*Spoken Thai*などで一応基礎  
的なタイ語をやった者が整理のために本書を使用する  
のなら、大いに有用であろう。なお、かなり誤植が多  
く、急いで製本した様な印象を受ける。(桂満希郎)

David D. Thomas et al. *Mon-Khmer  
Studies I*. Saigon: 1964. 163p.

Linguistic Circle of Saigon といっても一般には知  
られていないが、本書によると、南ベトナムの Saigon  
大学と米国の Summer Institute of Linguistics のメ  
ンバーによる研究会であるらしい。本書は、その研究  
会が1963年秋にユエ (Hue) で行なわれた際に読まれ  
た原稿をまとめた論文集である。著者は、編者として  
Introduction を書いている米国 North Dakota 大学の  
David D. Thomas を除いては、John and Elizabeth  
Banker, John and Carolyn Miller, Richard and  
Saundra Watson というこれまでほとんど無名であっ  
た人たちがばかりである。

本書で扱われている言語は、南ベトナムで話されて  
いる3つの少数民族の言語、すなわち Bahnar 語、  
Brou 語、Pacoh 語であって、いずれも東部モンクメ  
ル系統に属する。この系統の言語は、ラオス、ベトナム、  
カンボジアに様々な種類が分布しており、比較言語  
学的にクメル語を考えるうえで欠かせないものである  
にもかかわらず、事実上ほとんど未開拓のままであ  
った。その意味で本書の出現はまことに喜ばしいこと  
に違いない。ことに、このうちの Brou 語と Pacoh 語  
は今まで単にその名が知られていただけであった。

もっとも本書からはこれら3つの言語の断片しかわ  
からない。各論文とも記述的な研究であるが、短い論  
文であるうえ、取上げた問題も方法も異なっていて、全  
体としてひとつの言語の構造がわかるという体裁のも  
のではないからである。すなわち、Bahnar 語につい  
ては、(1) Clause Paradigm, (2) Affixation, (3) Re-  
duplication, Brou 語については、(1) Word Classes,  
(2) Substantive Phrase, Pacoh 語については、(1)  
Pronouns, (2) Phonemes が、それぞれ述べられている。

本書の主眼とする所はむしろ様々な記述方法の適用

例の提示ということにあるようである。たとえば、  
Bahnar 語の Clause Paradigm には transformational  
battery が、Brou 語の Substantive Phrase には  
tagmemic approach が用いられるという具合に。し  
かしこの場合、battery とか tagmemic, tagmatic と  
かいった術語に対して、十分な説明や定義がほしいも  
のである。これらはまだあまり熟していなかったり、  
学者によって用法が同じでないものだからである。

比較言語学的な論文としては Thomas によるモン・  
クメル語比較研究の展望があるのみであるが、まさに  
その中で述べられているように、この系統の言語の比  
較研究を困難にしている最大の原因は音素論的基礎の  
欠如である。それは本書の対象となっている言語につ  
いてもあてはまることである。

ともあれ、Schmidt より半世紀以上もたった今日よ  
うやく、しかしここ数年来にわかに、モン・クメル語  
の研究が活発になったことは事実であって、本書も  
またそのひとつの現われなのであろう。(三谷恭之)

Udom Warotamasikkhadit. *Thai Syntax:  
An Outline*. A Dissertation Presented to the  
Faculty of the Graduate School of the  
University of Texas. Bangkok: College of  
Education Prasarnmitr, 1963. v+70p.

タイ人によって書かれたタイ語に関する本というの  
は、一口に言えば、いかにして正しいタイ語を使用す  
るかという規範的なものがほとんどであった。しか  
し、最近になって、タイ人の若い学者で、主としてア  
メリカの記述言語学の方法を身につけ、それでもって  
タイ語を記述説明して行こうという人達が出て来てい  
る。本書はその代表的なものといえるであろう。した  
がって、本書はタイ語の規範を示すものでもないし、  
これでもってタイ語を勉強しようとしても全く無駄で  
あろう。言いかえれば、「いかにタイ語を使用すべき  
か?」ということは一応別にして、「タイ語とはどう  
いう構造の言語か?」ということを明らかにしようと  
するものである。

アメリカの構造言語学においても、従来の方法では  
説明し切れなかった多くの点を説明することのできる  
新しい言語理論として現れたのが Noam Chomsky,  
Emmon Back 等を中心とする Transformation の